『史記』における「辯」と「滑稽」（下）

大田加代子

目次（上）

0　はじめに
1　『史記』における「辯」の意味と用法
1．1　語法的分類
1．2　人の性質を表す「辯」

目次（下）

2　「辯」と「滑稽」と“所作事”
2．1　孔子と「滑稽」
2．2　「滑稽」と所作を伴った「辯」
2．2.1　「滑稽」の原義
2．2.2　「辯」の構造
2．2.3　エピソードの分析
2．2.4　「仰天」と「大笑」・「大哭」・「大呼」
3　滑稽列伝の形式と意義
3．1　滑稽列伝の形式
3．2　滑稽列伝の意義
4　むすび

2　「辯」と「滑稽」と“所作事”

本稿の（上）ですでにみたように、「辯」は潔癖さや清廉さ、学問をよくし利発であることなどの条件を兼ね備え、人物が優れていて初めてその正の特性を発揮する。『論語』学而篇に、

> 子曰．巧言令色鮮矣仁．
> 先生が言われた。「言葉を巧みに操り、顔色を繕って、他人を喜ばそうとする者には仁徳などほとんどないね。」

という言葉があるように、「辯」にはとかく負のイメージがつきまといがちなのだ。

『史記』全体の印象として、仁や徳、道や義といった儒教的価値観を一旦は容認しながらも、真の善人の認知と所謂天道の是非を訝り、後世に名を遺すことの難しさと、名を立てる基準について拘り続けているように見える。そのためか、社会のアウトサイダー的存在に対して寛容な態度をとっているように思われる。いやむしろ、それらに積極的な価値をすら見いだしているようだ。本節では、表１[1]の例文番号（７６）と（７７）（表２[2]の③形容詞のＡの用法にあたる、ともに巻１２６滑稽列伝）を中心に、『史記』における「辯」と「滑稽」との関係をみていくことにする。

２．１　孔子と「滑稽」

「言語に（長じた者に）は宰我・子貢」（『論語』先進篇）と列挙されるほど弁舌巧みであった弟子の宰我や子貢に対する孔子の負の評価の言葉が、巻６７仲尼弟子列伝に記されていることは前述した通りだが、ほかにも孔子といえば「言（言葉）」については一貫して、

> 子曰．君子食無求飽．居無求安．敏於行而慎於言．就有道而正焉．可謂好學也已．（『論語』学而篇）
> 先生が言われた。「君子は食は飽食を求めず、居は安楽を求めない。学

業には敏速に務め、言葉には慎み深くし、道徳を身につけた人につき従って是非を正してもらうならば、学問を好むといえるだろうね。」

子曰．君子欲訥於言．而敏於行．（『論語』里仁篇）
先生が言われた。「君子は、言葉は遅鈍にし、行いは敏捷にしようと務める。」

というように、言葉を慎み行いを貴ぶ姿勢が連想される。

所作についても『史記』巻４７孔子世家には、次のようなエピソードが載録されている。定公十年に魯は斉と和睦し、斉の大夫黎鉏の進言で魯と斉は夾谷で和平のための会合を開くことになった。定公は孔子の進言を容れて左右司馬を伴って斉侯に夾谷で会見した。壇位が設けられ、土階は三段で、会見は簡略な礼によって行われたが、遜った態度で譲り合って壇に登り．献酬の礼を終えた。

齊有司趨而進曰．請奏四方之樂．景公曰．諾．於是旍旄羽袚矛戟劍撥鼓噪而至．孔子趨而進．歴階而上．不盡一等．舉袂而言曰．吾兩君爲好會．夷狄之樂何爲於此．請命有司．有司却之．不去．則左右視晏子與景公．景公心怍．麾而去之．
有頃．齊有司趨而進曰．請奏宮中之樂．景公曰．諾．優倡侏儒爲戲而前．孔子趨而進．歴階而上．不盡一等．曰．匹夫而營惑諸侯者．罪當死．請命有司．有司加法焉．手足異處．

斉の役人が進み出て申し上げた。「四方の国々の音楽を演奏してお聞かせしたいと存じます。」景公は「よろしい。」と言った。そこで、旍旄、羽袚、矛戟、劍撥を手にした楽師たちが太鼓に合わせて大声を上げ進んで来た。孔子は進み出て、階を登るのに足も揃えず、最後の一段を残して、袂を振り挙げて言った。「御両君には友好的な会見をなされておりますのに、夷狄の音楽などどうして演奏なさるのですか。お役人に止めさせるようお命じ下さい。」役人は止めさせようとしたが、楽師たちは退出しないので、側近の者達は晏子と景公をじっと見守っていた。景公は心中恥じて、手を振って下がらせた。

しばらくして、斉の役人が進み出て申し上げた。「宮中の音楽を演奏してお聞かせしたいと存じます。」景公は「よろしい。」と言った。俳優や小人がおどけながら前へ出てきた。孔子は進み出て、階を登るのに足も揃えず、最後の一段を残して言った。「匹夫にして諸侯を惑わそうとする者は、その罪は死にあたります。どうかお役人に処罰をお命じ下さい。」役人は彼らを処刑し、手足をばらばらにした。

景公は懼れ動揺し、義では魯に及ばないと悟った。景公は都へ帰っても大いに恐れ、対策を練った。役人の提案に従い、斉公は侵略した魯の鄆、汶陽、亀陰の土地を返還して過失をわびた。この話は、『春秋穀梁伝』定公十年に記載があり、「優倡侏儒」ではなく優倡の名「優施」がみえる[31]。

十年．春王三月．及齊平．夏．公會齊侯于頰谷．公至自頰谷．離會不致．何爲致也．危之也．危之則以地致何也．爲危之也．其危奈何．曰．頰谷之會．孔子相焉．兩君就壇．兩相相揖．齊人鼓譟而起．欲以執魯公．孔子歴階而上．不盡一等．而視歸乎齊侯曰．兩君合好．夷狄之民何爲來爲．命司馬止之．齊侯逡巡而謝曰．寡人之過也．退而屬其二三大夫曰．夫人率其君與之行古人之道．二三子獨率我而入夷狄之俗．何爲．罷會．齊人使優施舞於魯君之幕下．孔子曰．笑君者．罪當死．使司馬行法焉．首足異門而出．齊人來歸鄆．讙．龜陰之田者．蓋爲此也．

以上のエピソードから孔子が優倡侏儒の輩を忌むこと甚だしく、諸侯を惑わせ君主を笑わせることはその罪が死に値すると考えていたことがみてとれる。これは二国の王が会見するときの話で、礼や楽の正しいあり方を最重視していた孔子の厳格さは一国内の内政にとどまらず、外交において相手国にまで及んだ。

更に興味深いのはこの出来事が斉の国で起こったということだ。斉は文化国家魯のブレーン孔子からは、このように礼楽をわきまえない夷狄扱いをされてしまい、晏子もこの場面ではただ黙って見守るよりなすすべがないのだが、斉といえば優れた弁士を輩出した国なのだ。あの蘇秦も張儀も斉の国に遊学して、共に縦横家鬼谷先生に弁論の術を習っているし、春秋時代に遡れば、管仲は斉の桓公に仕え、晏子も斉の霊公、荘公、そして景公に仕えた。

『史記』巻７４孟子荀卿列伝に取り上げられているのは皆、斉の国に縁のある者達ばかりだ。「三鄒子」（鄒忌・孟子・鄒衍）に始まって、「稷下先生」と総称された、稷門の下に集まった斉の学士集団（淳于髡ーー「稷下先生」の筆頭淳于髡はその諫言説得において、晏子の人となりを慕っていた。詳しくは『補遺』で述べるが、淳于髡と晏子は共に斉人であったばかりでなく、身体的特徴も、身長が短小という共通点を持っている。ーー・慎到・環淵・接子・田駢・騶奭等）、そして五十歳にして始めて斉に遊学に来た荀卿。その荀卿に学んだのは李斯と韓非子だった。

２．２　「滑稽」と所作を伴った「辯」

さて、孔子の姿勢を尊重するのであれば当然避けなければならない、言葉に慎みのないおしゃべりや優倡侏儒にまつわる話を、『史記』では一列伝を立てて、集伝の形で載録している。巻１２６滑稽列伝は、淳于髡についてのエピソード３話、優孟についてのエピソード２話、優旃についてのエピソード３話の計８話からなっている[4]。これらの記述が歴史的事実であるかどうかや後人の挿入の有無については今ここでは論じない[5]。本節では今みられる形の滑稽列伝の８つのエピソードにおける「辯」のあり方と、エピソードの展開をみていくことにする。

２．2.1　「滑稽」の原義

「滑稽」の語釈[6]については、巻７１樗里子列伝「樗里子滑稽多辯．秦人號曰智囊（樗里子は言葉が立板に水を流すように淀みなく流れ出て、辯が立った。秦の人々は彼を智嚢と呼んだ。）」の部分の『史記索隠』（以下『索隠』と略称）に、

（１）滑音骨．稽音雞．鄒誕解云．滑．亂也．稽．同也．<u>謂辨捷之人．言非若是．謂能亂同異也．</u>[7]
滑の音は骨。稽の音は雞。鄒誕が解釈していう。滑は乱、稽は同である。物事をわきまえ聡い人をいう。非を是のように言いくるめ、異同を乱すことをいう。

（２）一云．滑稽．酒器．可轉注吐酒不已．以言俳優之人．出口成章．詞不窮竭．如滑稽之吐酒不已也．
一説に、滑稽は酒器。酒を注いで尽きることがない。そのことに寄せて、俳優が言葉が口をついて出て文を成し、言葉が尽きることがないさまが、滑稽が酒を吐き出して尽きることがないようであることをいう。

とあり、同所の『史記正義』（以下『正義』と略称）に、

（３）滑讀爲滑．水流自出．稽．計也．言其智計宣吐如泉．流出無盡．故揚雄酒賦云．鴟夷滑稽．腹大如壺．是也．
滑は読んで滑となす。水が自ずから流れ出ること。稽は計である。その智計が泉のように流れ出して尽きることがないことをいう。故に揚雄の『酒賦』に「鴟夷滑稽、腹の大なること壺のごとし」といっているのがその例である。

（４）顔師古云．滑稽．轉利之稱也．滑．亂也．稽．礙也．其變無留也．[8]
顔師古曰く、滑稽は変転の滑らかなことを表している。滑は乱である。稽は礙である。変化が留まるところがないことである。

（５）一説．稽．考也．言其滑亂不可考較．[9]
一説に、稽は考である。乱れていて考え調べることができないことをいう。

又、巻１２６滑稽列伝の「（褚先生曰．臣……）復作故事滑稽之語六章．（また「滑稽」にちなんだエピソードを６話述作した。）」の『索隱』に、

（６）楚詞云．將突梯滑稽．如脂如韋．崔浩云．滑音骨．滑稽．流酒器也．轉注吐酒．終日不已．言出口成章．詞不窮竭．若滑稽之吐酒．故揚雄酒賦云．鴟夷滑稽．腹大如壺．盡日盛酒．人復籍沽．是也．[10]
『楚辞』卜居にいう。「将た突梯滑稽、脂のごとく韋のごとく

（もって絜楹せんか。）」崔浩いわく、滑の音は骨。滑稽は酒を注ぐ器である。酒を注いで終日止まない。言葉が口をついて出てきて文を成し、言葉が窮まり尽きることがないことが、滑稽の酒を吐くようであることをいっている。故に揚雄の『酒賦』に「鴟夷滑稽、腹の大なること壺のごとし。尽日酒を盛りて、人復た籍沽す。」といっているのがその例である。

（７）又姚察云．滑稽．猶俳諧也．滑讀如字．稽音計也．言諧語滑利．其知計疾出．故云滑稽．[11]
又姚察がいわく、滑稽は俳諧に近い。滑は字のごとく読み、稽は計である。おかしみのある言葉が滑らかで、智計が素早く出てくることをいう。故に滑稽といっている。

とある。以上をまとめると、「滑稽」の発音については、「コツ（骨）ケイ（雞）」／「コツ（淈）ケイ（計）」と「カツ（讀如字）ケイ（計）」の二説あり、意味については大別すると、「言葉巧みで非を是と言いくるめ、是非を混乱させる」負の方向のもの（（１）（４）（５））と「言葉が滑らかで淀みなく、文成し尽きず、知謀も素早く機知に富んでいる」正の方向のもの（中立も含む）（（２）（３）（６）（７））の二説に分かれる。前者では共通して「滑」を「乱」と解しているのに対し、後者では（２）（６）は「滑稽」を「酒を注ぐ器」と解し、（３）も「水の流れが自然と出てくる」と水に比して解し、（７）のみは「なお俳諧のごとし」と、最も今日的な意味に近い「戯れ」のニュアンスを出している。又（２）では具体的に「俳優」の台詞回しの巧みな様子であると説明している。

本稿は、後述するように、滑稽列伝に「辯」のあり方の肯定的なひとつの典型をみようとするものである。従って、①言葉がとくとくと口をついて出て文を成し、尽きることがなく、②知謀も泉のように、素早く流れ出て尽きず、③おかしみを含み、機知に富んでいる、という三要素に、俳優的要素を加えた四要素を「滑稽」の必要条件と考えることにする。

２．2.2　「辯」の構造

滑稽列伝にみられる「辯」の作用は全て諫言である。滑稽列伝には大別し

て４種の諫言のパターンがある。（［　］はエピソードによっては該当する部分が無い場合があることを示す。）

① 極論のパターン（立て板に水の要素）
　１）a） 君主の無謀な計画［＋諫言の禁止］
　　b） 同意
　　［c） 君主の質問］
　２）計画支持（＝極論の展開＝諫言の同時進行）
　３）君主の計画撤回（＝自悟＝諫言の聴従）

② 「隠語」パターン（知謀の要素）
　１）a） 改善すべき事態［＋諫言の禁止］
　　b） 隠語
　　［c） 君主の質問］
　［２）「隠語」の解説（＝譬え話＝諫言の同時進行）］
　３）君主の行動

③ 「笑う」パターン（おかしみの要素）
　１）a） 君主の政策（＝挙兵、征伐又は理不尽な計画）［＋諫言の禁止］
　　b） ［仰天］［大］笑
　　c） 君主の質問（＝笑った理由を詰問＝諫言の禁止の忘却）
　２）「笑い」の解説 （＝譬え話＝諫言の同時進行）
　３）君主の政策変更（＝自悟＝諫言の聴従）

④ 芝居がかりのパターン（俳優の要素）
　１）a） 不利益を被っている第三者の出現（＝芝居の伏線）
　　b） 不利益を被っている第三者との申し合わせ
　　［c） ひと芝居打つための準備］
　２）君主の目前での演技（＝劇中劇により直諫が間接化）
　３）不利益の改善（＝間接化した直諫のコードを解読＝進言の受容）

それぞれのパターンには最も強く現れている要素を挙げたが、どのパターン

にも実際は「滑稽」の四要素のうち複数の要素が備わっている。又、①から④までを更に簡略化すれば、

1）a）問題の発生（主体：君主自身または第三者）
　　b）諫言の伏線（主体：滑稽列伝の中心人物）
　　c）問題の一時的忘却（主体：君主または読み手））
2）諫言の遂行（主体：滑稽列伝の中心人物）
3）問題の解決（主体：君主）

という図式に還元される。

2．2.3　エピソードの分析

（1）淳于髡　エピソードA[12)13)]　パターン②

1）a）齊威王之時喜隱．好爲淫樂長夜之飲．沈湎不治．委政卿大夫．百官荒亂．諸侯並侵．國且危亡．在於旦暮．左右莫敢諫．
2）淳于髡説之以隱曰．國中有大鳥．止王之庭．三年不蜚又不鳴．王知此鳥何也．
　王曰．此鳥不飛則已．一飛沖天．不鳴則已．一鳴驚人．
3）於是乃朝諸縣令長七十二人．賞一人．誅一人．奮兵而出．諸侯振驚．皆還齊侵地．威行三十六年．語在田完世家中．[14)]

（2）淳于髡　エピソードB[15)]　パターン③

1）a）威王八年．楚大發兵加齊．齊王使淳于髡之趙請救兵．齎金百斤車馬十駟．
　　b）淳于髡仰天大笑．冠纓索絶．
　　c）王曰．先生少之乎．髡曰．何敢．王曰．笑豈有説乎．
2）髡曰．今者臣從東方來．見道傍有穰田者．操一豚蹄．酒一盂．而祝曰．甌窶滿篝．汙邪滿車．五穀蕃熟．穰穰滿家．臣見其所持者狹．而其所欲者奢．故笑之．

3）於是齊威王乃益齎金千鎰．白璧十雙．車馬百駟．髡辭而行．至趙．趙王與之精兵十萬．革車千乘．楚聞之．夜引兵而去．

（3）淳于髡　エピソードC　パターン②

1）a）威王大説．置酒後宮．召髡賜之酒．問曰．先生能飲幾何而醉．
b）對曰．臣飲一斗亦醉．一石亦醉．
c）威王曰．先生飲一斗而醉．惡能飲一石哉．其説可得聞乎．
2）髡曰．
賜酒大王之前．～　而飲不過一斗徑醉矣．
若親有嚴客．～　飲不過二斗徑醉矣．
若朋友交遊．～　飲可五六斗徑醉矣．
若乃州閭之會．～　飲可八斗而醉二參．
日暮酒闌．～　當此之時．髡心最歡．能飲一石．
故曰酒極則亂．樂極則悲．萬事盡然．言不可極．極之而衰．以諷諫焉．
3）齊王曰．善．乃罷長夜之飲．以髡爲諸侯主客．宗室置酒．髡嘗在側．

（4）優孟　エピソードA[16]　パターン③＋①＋②

③
1）a）楚莊王之時．有所愛馬．衣以文繡．置之華屋之下．席以露床．啗以棗脯．馬病肥死．使群臣喪之．欲以棺椁大夫禮葬之．左右爭之．以爲不可．王下令曰．有敢以馬諫者．罪至死．
b）優孟聞之．入殿門．仰天大哭．
c）王驚而問其故．
2）①
1）b）優孟曰．馬者王之所愛也．以楚國堂堂之大．何求不得．而以大夫禮葬之薄．請以人君禮葬之．
c）王曰．何如．
2）對曰．臣請以彫玉爲棺．文梓爲椁．楩楓豫章爲題凑．發甲卒爲穿壙．老弱負土．齊趙陪位於前．韓魏翼衛其後．廟食太牢．奉以萬戶之邑．諸侯聞之．皆知大王賤人而貴馬也．

3）②

1）c）王曰．寡人之過一至此乎．奈何．

2）優孟曰．請爲大王六畜葬之．以櫬竁爲椁．銅歴爲棺．齊以薑棗．薦以木蘭．祭以粳稻．衣以火光．葬之於人腹腸．

3）於是王乃使以馬屬太官．無令天下久聞．

（5）優孟　エピソードB[17]　パターン④

1）a）Ⅰ　楚叔孫敖知其賢人也．善待之．病且死．屬其子曰．我死．汝必貧困．若往見優孟．言我孫叔敖之子也．

Ⅱ　居數年．其子窮困．負薪．逢優孟．與言曰．我孫叔敖之子也．父且死時．屬我貧困往見優孟．

b）優孟曰．若無遠有所也．

c）即爲叔孫敖衣冠．抵掌談話．歲餘像叔孫敖．楚王左右不能別也．

2）莊王置酒．

優孟前爲壽．

莊王大驚．以爲叔孫敖復生也．欲以爲相．

優孟曰．請歸與婦計之．三日而爲相．

莊王許之．

2´）三日後．

優孟復來．

王曰．婦言謂何．

Ⅰ孟曰．婦言．慎無爲楚相．不足爲也．如叔孫敖之爲楚相．盡忠爲廉以治楚．楚王得以霸．今死．其子無立錐之地．貧困負薪以自飲食．如叔孫敖．不如自殺．

Ⅱ因歌曰．山居耕田苦．難以得食．起而爲吏．身貪鄙者餘財．不顧恥辱．身死家至富．又恐受賕枉法．爲姦觸大罪．身死而家滅．貪吏安可爲也．念爲廉吏．奉法守職．竟死不敢爲非．廉吏安可爲也．楚相叔孫敖．持廉至死．方今妻子窮困負薪．而食不足爲也．

3）於是莊王謝優孟．乃召叔孫敖之子．封之寢立．四百戶以奉其祀．

（6）優旃　エピソードA　パターン④

1）a）秦始皇時置酒．而天雨．階楯者皆沾寒．
　b）優旃見而哀之曰．汝欲休乎．　階楯者皆曰．幸甚．
　c）優旃曰．我即呼汝．汝疾應曰．諾．
2）居有頃．殿上上壽呼萬歳．優旃臨檻大呼曰．階楯郎．郎曰．諾．優旃曰．汝雖長．何益．幸雨立．我雖短也．幸休居．
3）於是始皇使階楯者得半相代．

（7）優旃　エピソードB　パターン①

1）a）始皇嘗議欲大苑囿．東至函谷關．西至雍陳倉．
　b）優旃曰．善．
2）多縱禽獸於其中．寇從東方來．令麋鹿觸之足矣．
3）始皇以故輟止．

（8）優旃　エピソードC　パターン①

1）a）二世立．又欲漆其城．
　b）優旃曰．善．
2）主上雖無言．臣固將請之．漆城雖於百姓愁費．然佳哉．漆城蕩蕩．寇來不能上．即欲就之．易爲漆耳．顧難爲蔭室．
3）二世笑之．以其故止．

2．2.4　「仰天」と「大笑」・「大哭」・「大呼」

『史記』の中で「仰天」という動作と、「大笑」・「大哭」という感情表現が組み合わされているのは滑稽列伝だけである。滑稽列伝以外では、天を仰ぐ動作と結びつくのは、「仰天［而］歎」[18]「仰天太息」[19]「悲號仰天」[20]「仰天大號天」[21]等、全て自分の意志では如何ともしがたい、人生を支配する天命に対する悲痛な嘆きである。又、『史記』における笑いは、田中謙二氏が「『史記』の〈笑い〉」[22]で述べておられるように、「「自嘲」又は自嘲を含んだ〈笑い〉」であり、「笑う主體が悲運の英雄」であっ

て、「かれらの悲惨な最期にちかい段階で凄惨な〈笑い〉をわらわせて、悲劇の主人公のイメジを強調したようにおもわれる」という働きを担っている例が多い。ところが滑稽列伝においては、本来は感情表現である泣き笑いを、一種のパフォーマンスとして完全にコントロールし、君主の前で演じてみせている。これは自らの行為の相手に与える効果が計算し尽くされた技術である。しかも彼らは「滑稽」という要素も持ち合わせ、所作を伴った雄弁さをもって、君主の諫言・進言にあたったのである。

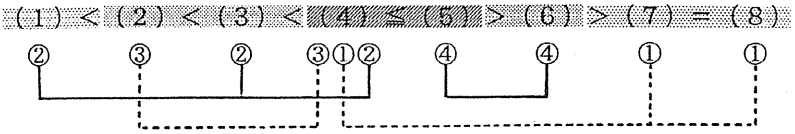
ここで思い出されるのは、巻６９蘇秦列伝の、

> 蘇秦見齊王．再拜．俯而慶．仰而弔．齊王曰．是何慶弔相隨之速也．
> 蘇秦は斉王に謁見すると、再拜し、平伏して慶びを申し上げ、顔を上げるとお悔やみを申し上げた。斉王が言った。「何故続けざまに慶弔を申し述べるのだ。」と。[23]

である。まず言葉で説得する前に、奇異な行為によってこれから説こうとする内容を暗示させ、この行為の意味を解説することが、説得遂行の布石となっている。滑稽列伝においても同様に、故意に笑ったり泣いたり、これみよがしに大きな声で叫んだりすることが、正攻法では諫言のできない、例えば君主が諫言を禁じていたりする状態を打開する。君主の注意を引きつけ、奇異な行為に対して純粋な好奇心を抱かせる。こうすることで、当面の問題から注意を外らし、諫言されることに対する心の抵抗を解く。一種の心理トリックである。これが蘇秦の所謂「揣摩」の術、すなわち人の心の機微をとらえる術である。

３　滑稽列伝の形式と意義

一見何の脈絡もなく数話のエピソードが羅列してあるだけに見える滑稽列伝であるが、２．2.3でみたように、各エピソードに共通のパターンがあり、エピソードの複雑度（話の膨らみ）という観点からみると、



というように、シンプルなエピソードから、次第に複雑化し、（５）が滑稽列伝の中では最も充実し精彩を放つエピソードになっており、その後又次第にシンプルなエピソードへと収束してゆく。そのハイライトたる優孟のエピソードについて、梁玉繩『史記志疑』では「案．優孟之事，決不可信．所爲滑稽也．（案ずるに優孟のことは決して鵜呑みにしてはいけない。所謂滑稽だから。）」としているのは誠に興味深い。本節では滑稽列伝に記載された話の真偽に関わらず、諸エピソードをここにひとつにつなぎ止めているものは何かについて考えてみたい。

３．１　滑稽列伝の形式

滑稽列伝の形式は、同じく社会的アウトサイダーの記録である刺客列伝と共通点がある。『史記』の中には「特殊の職業・身分・性格の人たちをあつめた列伝」[24]である集伝が８列伝ある。（巻８６刺客列伝・巻１１９循吏列伝・巻１２１儒林列伝・巻１２２酷吏列伝・巻１２４游侠列伝・巻１２５佞幸列伝・巻１２６滑稽列伝・巻１２９貨殖列伝）[25]これらの中で集伝に載録された各人物を繋ぐ表現として「其後～年．［而］□有○○［之事］」という形式が用いられているのは刺客列伝と滑稽列伝だけである。[26]刺客列伝では、

曹沫者．魯人也．……其後百六十有七年．而吳有專諸之事．
專諸者．吳堂邑之人也．……其後七十餘年．而晉有豫讓之事．
豫讓者．晉人也．……其後四十餘年．而軹有聶政之事．
聶政者．軹深井里人也．……其後二百二十餘年．而秦有荆軻之事．
荆軻者．衛人也．

となっており、最後の荆軻の話は、荆軻の暗殺失敗と死の後日談の記述の後、

魯の句践の荆軻に対するコメントで締めくくられている。滑稽列伝では、

淳于髡者．齊之贅壻也．……其後百餘年．楚有優孟．
優孟者．故楚之樂人也．……其後二百餘年．秦有優旃．
優旃者．秦倡朱儒也．

となっており、最後の優旃の話は、優旃の仕えた二世皇帝の殺された後、漢に帰順し、数年して死んだことを記して終わっている。両列伝に用いられたこの形式は、数種の類型的なエピソード群をひとつの列伝に集め、体裁を整えるための方便と考えられる。

滑稽列伝に記載されている三者の、最初のエピソードの前にはそれぞれ、

淳于髡者．齊之贅壻也．長不滿七尺．滑稽多辯．數使諸侯．未嘗屈辱．
淳于髡は斉の国の婿養子である。身の丈は七尺に満たなかったが、舌はよく回り口数も多く弁が立った。しばしば諸侯のもとに使者として赴いたが一度も屈辱を受けたことがなかった。

優孟者．故楚之樂人也．長八尺．多辯常以談笑諷諫．
優孟は、昔の楚の国の楽師である。身の丈八尺。口数多く弁が立ち、よく人を笑わせるような話や仕草で君主を風刺し諫言した。

優旃者．秦倡侏儒也．善爲笑言．然合於大道．
優旃は、秦の俳優で小人だった。面白おかしい話に巧みだったが、それが大道に合致していた。

というように、彼らが所謂アウト・サイダーだったことを示す、身分（社会的地位）、身体的特徴、そして言語的特徴[27]についての記述がある。身分については「贅壻」「樂人」「倡」という社会的余剰物[28]であることを示す言葉が挿入され、本来人から軽蔑され屈辱を受け笑いの対象となる立場であることを明示しながら、積極的に自ら笑い自覚的に人を笑わせる主体たることが暗示されている。身体的特徴については、身長の大小を表す言葉「長不滿七尺」「長八尺」「侏儒」によって常人と異なっていることが示され、

言語的特徴は、「滑稽多辯」「多辯」「談笑」「笑言」によって、淀みなく滑らかで、言葉数が多く尽きないことと、笑いの要素が表されている。

巨人とまでは言えないまでも大男の優孟を間に挟んで、短身の淳于髡と小人の優旃、淳于髡は「滑稽多辯」、優孟は「多辯」と「笑」とを兼ね添え、優旃は専ら「笑」を主軸としたエピソードが連なっているのが滑稽列伝である。

３．２　滑稽列伝の意義

巻１３０太史公自序には、

> 不流世俗．不爭勢利．上下無所凝滯．人莫之害．以道之用．作滑稽列傳第六十六．
> 世俗に流されず、権勢や利益を争わず、上にも下にも拘泥することなく、人々は彼らに害をあたえない。道をもって働きを為したので、滑稽列伝第六十六を作る。

とあり、滑稽列伝を作る所以として、その働き（作用）が「道」に叶っていることが挙げられている。滑稽列伝の太史公論賛には、

> 太史公曰．淳于髡仰天大笑．齊威王横行．優孟搖頭而歌．負薪者以封．優臨欄疾呼．階楯得以半更．豈不亦偉哉．
> 太史公曰く、淳于髡が天を仰いで大笑いしたため、斉の威王は天下を我が物顔で歩くことができた。優孟が首を振って歌を歌ったため、薪を担いで口に糊していた者は領地を授かった。優旃が欄干に臨み大声で叫んだため、護衛は半分ずつ交代できるようになった。なかなか大したものではないか。

とある。これらが滑稽列伝に記載された三者の効用である。これもまた「偉業」というべきだという認識に基づいている。又、滑稽列伝には序文があり、

孔子曰．六藝於治一也．禮以節人．樂以發和．書以道事．詩以達意．易以神化．春秋以義．
太史公曰．天道恢恢．豈不大哉．談言微中．亦可以解紛．
孔子曰く、六芸は教化治国においては、その働きはひとつである。礼は人に礼節を与え、楽は調和をもたらし、書は事実を明らかにし、詩は心の中の想いを表し、易は森羅万象を神化し、春秋は義を教える。
太史公曰く、天道は広々としてなんと大きいことか。ささやかな談笑の言葉であっても、奥深い微妙な言葉が人の意に中れば、紛糾した問題を解決することもできるのだ。

とある。滑稽列伝の意義はこの言に尽くされている。ここには舌禍の危険性とは裏腹な言葉に対する信頼感があるように思われる。「辯」によって身を立て、やがては「辯」によってその身を滅ぼしてゆく蘇秦や張儀の列伝にみられるような皮肉も、口乞だったため口頭の弁論はできないかわりに論述に長けており、『説難』等弁論についての優れた著作を遺しながらも自分の身は救えなかった韓非子に対する悲しみもここにはなく、ただ乾いたおかしみがあるだけだ。

滑稽列伝は三人の人物についてそれぞれ断片的な二、三のエピソード群があるのみで、各エピソードを繋ぐ話もないし、一貫したストーリーもない。これらのエピソード群を有機的に結び付けているのは上述した形式と、三者に共通の言語の特徴、すなわち「滑稽多辯」と、大いなる「道」に叶った言語の作用、すなわち「談言微中」なのだ。

4　むすび

プロフェッショナルな遊説家に代表される職業的「辯士」は、弁論の場面設定には一過性の笑いを必ずしも必要とはせず、同じ論理の展開を繰り返し利用することを可能にする常套句をその言説の中に織り込んで、独自の説得パターンを持っている。それに対し滑稽列伝に集められた弁舌は、しばしば説得の場が「置酒（酒宴）」であり、だからこそ許容される「仰天大笑」「仰天大哭」「大呼」といったパフォーマンス性の高い要素をもち、それゆ

え一発芸的色彩が濃くなっている。このことは類話の多さと裏表の関係になっている。

『史記』の文を「記事」の文と「記言」の文とに分けて考えると、事柄を記すよりもむしろ三寸の舌の産物たる言葉を記すことに主眼があるように思えるものが少なくない。滑稽列伝の様式に端的に現れているごとく、脚本の卜書のように、「記事」の文が「記言」のためにあるようにさえ読めるものもある。「曰」という動詞はその使用頻度からいっても、用法からいっても特殊なものと考えざるを得ない。しかも「曰」によって導かれ記された言葉の多くは今日的な目からみれば、決して歴史的名演説でもなければ、歴史史料として保存されるべきものでもない。滑稽列伝に載録されているエピソードはその最たるものだ。

話された言葉を想定して言を記せば、自ずと虚字をはじめ字数は増えるであろうし、時には重複も厭わず同じ発言を同一エピソード内に複数箇所載せているのはある意味で過剰ともいえ、当時の筆記用具の制約を考えると、単に作文上の効果では済まされない不可解さが残る。より簡潔に、削れるものは極力削り取り文章を研ぎすますことをよしとする一方で、語録の類にみられる虚字の多さや、繰り返しの表現の多さ、先行史料の記言の伝統。『史記』以後の正史にも当然のことのように事柄と並んで記されてゆく膨大な言葉の記録。そこには正にも負にも解し得る「滑稽」を下敷きとした饒舌さがある。ここに中国人の言語観、「辯」に対する意識が潜んでいるのではないだろうか。

注１）拙文「『史記』における「辯」と「滑稽」（上）」『名古屋大学中国語学文学論集』第五輯１９９２年所収参照。

注２）同上。

注３）『春秋左氏伝』哀公二十五年には優某という名の人物が記載されており、杜預の注によれば優狡は「俳優」で、彼を遣わし衛の大夫挙彌と盟約を結ばせたのは挙彌を辱めるためだった。

注４）「褚先生曰」以下は考察の対象としない。

注５）『史記會注考證』巻１２６「滑稽列傳第六十六」の考證、『史記志疑』巻３５滑稽列伝第六十六「威王八年．楚大發兵加齊．」「其後

百餘年．楚有優孟．」「因歌曰．」「其後二百餘年．秦有優旃．」の項、『史記探源』巻八「髡後百余年．接．楚有優孟．」の項等参照。

注６）中華書局本に従った。

注７）「滑．亂也」以下の説は、會注考證本、百衲本ともに「滑稽列傳第六十六」の項にもみられる。

注８）この説は會注考證本では「滑稽列傳第六十六」の項にもみられる。

注９）この説も會注考證本では「滑稽列傳第六十六」の項にもみられる。

注１０）この説は百衲本では「滑稽列傳第六十六」の項の後に、會注考證本では中華書局本と同じ所にみられる。

注１１）この説も百衲本では「滑稽列傳第六十六」の項の後に、會注考證本では中華書局本と同じ所にみられる。

注１２）このエピソードの隠語と同じモチーフは、『史記』巻４０楚世家に載録されているが、前半は隠語を用いながらも直諫の体裁をとっており、王も諫言の意図を察しながらも敢えて言葉で「わかっているから下がれ」と答えた上で無視し、後半は完全な直言型で、類型は全く異なっている。

莊王即位三年．不出號令．日夜爲樂．令國中曰．有敢諫者死無赦．
伍舉入諫．莊王左抱鄭姬．右抱越女．坐鐘鼓之間．
伍舉曰．願有進．隱曰．有鳥在於阜．三年不蜚不鳴．是何鳥也．
莊王曰．三年不蜚．蜚將沖天．三年不鳴．鳴將驚人．舉退矣．吾知之矣．
居數月．淫益甚．大夫蘇從乃入諫．王曰．若不聞令乎．對曰．殺身以明君．臣之願也．
於是乃罷淫樂．聽政．所誅者數百人．所進者數百人．任伍舉．蘇從以政．國人大説．

注１３）淳于髡が「隠語」や「微言」を好み、それらに巧みだったことは、巻４６田敬仲完世家の淳于髡と騶忌子の問答からもわかる。その問答の後で淳于髡は騶忌子を評して、

是人者．我語之微言五．其應我若響之應聲．是人必封不久矣．
この人は、私が彼に奥深い言葉（と同時に謎かけ）を五つ語りかけたのだが、その私の言葉に対する反応は、打てば響くようであった。この人はきっと間もなく領地を封ぜられるだろう。

と言っており、奥深い意味を込めた微妙な言に相当自信を持っていたことがわかる。

注１４）巻４６田敬仲完世家にはこのエピソードは載っていない。

注１５）このエピソードの類話は『説苑』巻８尊賢、『説苑』巻６復恩に載録されている。

『説苑』巻８尊賢

１´）a）十三年．諸侯擧兵以伐齊．齊王聞之．惕然而恐．召其群臣大夫．告曰有智爲寡人用之．

b）於是博士淳于髡仰天大笑而不應．

c）王復問之．又大笑不應．三問．三笑而不應．王艴然作色不悦曰．先生以寡人語爲戲乎．

２´）對曰．臣非敢以大王語爲戲也．臣笑臣隣之祠田也．以一奩飯．一壺酒．三鮒魚．祝曰．蟹堀者宜禾．洿邪者百車．傳之後世．洋洋有餘．臣笑其賜鬼薄而請之厚也．

３´）於是王乃立淳于髡爲上卿．賜之千金．革車百乘．與平諸侯之事．諸侯聞之．立罷其兵．休其士卒．遂不敢攻齊．此非淳于髡之力乎．

『説苑』巻６復恩

１´）a）楚魏會於晋陽．將以伐齊．齊王患之．使人召淳于髡曰．楚魏謀欲伐齊．願先生與寡人共憂之．

b）淳于髡大笑而不應．

c）王復問之．又復大笑而不應．三問而不應．王怫然作色曰．先生以寡人國爲戲也．

２´）淳于髡對曰．臣不敢以王國爲戲也．臣笑臣隣之祠田也．以奩飯與一鮒魚．其祝曰．下田洿邪．得穀百車．蟹堀者宜禾．臣

笑其所以祠者少．而所求者多．

3´）王曰．善．賜之千金．革車百乘．立爲上卿．

話としての完成度という観点からいうと、いずれも『史記』に記載されているエピソードよりも劣っている。

『史記』では笑いを中心として、笑いの原因（「其所持者狹．而其所欲者奢．」）と、笑いの原因の除去が譬え話を挟んで首尾一貫している。そして、楚の攻撃／斉王－使者／淳于髡－支援／楚という関係が淳于髡を仲立ちとして明確になっている。それゆえ淳于髡の笑いのインパクトが最大限生かされる構造となっている。

一方『説苑』では、「臣笑其賜鬼薄而請之厚也．」「臣笑其所以祠者少．而所求者多．」のそれぞれ「薄」「少」が例えている事態がどこにも書かれておらず、何を承けているのか不明確である。そのため淳于髡の笑いが唐突な印象を与える。その上「三問」「三笑」で話の緊迫感が失われてしまっている。

又『史記』では3）の問題の解決部は必ず「於是」「乃」「以故」のうちどれかで（「於是」と「乃」は共起もする）締めくくられている点、各エピソード間に共通している。

注16）このエピソードの類話は『説苑』巻9正諫に載録されている（パターンは①に相当）。

その1

1´）a）景公有馬．其圉人殺之．公怒．援戈將自擊之．

b）晏子曰．此不知其罪而死．臣請爲君數之．令知其罪而死．

c）公曰．諾．

2´）晏子舉戈而臨之曰．汝爲吾君養馬而殺之．而罪當死．汝使吾君以馬之故殺圉人．而罪又當死．汝使吾君以馬故殺人．聞於四隣諸侯．汝罪又當死．

3´）公曰．夫子釋之．夫子釋之．勿傷吾仁也．

その2

1´）a）景公好戈．使燭雛主鳥而亡之．景公怒而欲殺之．

b）晏子曰．燭雛有罪．請數之以其罪．乃殺之．

c）景公曰．可．

２′）於是乃召燭雛．數之景公前曰．汝爲吾君主鳥亡之．是一罪也．使吾君以鳥之故殺人．是二罪也．使諸侯聞之以吾君重鳥而輕士．是三罪也．數燭雛罪已畢．請殺之．

３′）景公曰．止．勿殺而謝之．

注１７）優孟のエピソードＢについては宮崎市定氏の「身振りと文学――史記成立についての試論――」『宮崎市定全集』第五巻所収に詳しい考察がある。しかし宮崎氏の説にはにわかには賛同しがたい。或いは一瞬孫叔敖が生き返ったかと思うほど優孟の演技は真に迫っていたかも知れないが、荘王は優孟があまりにも在りし日の孫叔敖に似ているために、驚きのあまり、酔った勢いもあって、孫叔敖を追念して優孟を宰相にしようと考えたのかもしれないからだ。その証拠に、３日後に再び優孟が言う科白では、孫叔敖が今は無き第三者として言及されていて優孟が孫叔敖を演じているとは考えにくい。

注１８）伍子胥（巻６６伍子胥列伝）１例、李斯（巻８７李斯列伝）２例（うち１例は、続いて「垂涙太息」とある）、韓信（巻９２淮陰侯列伝）１例、扁鵲（巻１０５扁鵲列伝）１例。

注１９）韓王（巻６９蘇秦列伝）１例、樊於期（巻８６刺客列伝）１例。

注２０）民衆（巻１１８淮南衡山列伝中の伍被の言葉の中）１例。

注２１）二世皇帝公子将閭（巻６秦始皇本紀）１例。

注２２）『東方學報』第四十一冊１９７０年所収。

注２３）拙文「説得の文章――『史記』の蘇秦・張儀列伝を例に」『名古屋大学人文科学研究』第２０号所収参照。

注２４）貝塚茂樹『史記』中央公論社１９６３年。

注２５）巻１２７日者列伝は職業名が列伝のタイトルになっているが、実質的には司馬季主一人の列伝であるため除外した。又、貨殖列伝は人物中心の部分と、地誌的部分の二本立てである。

注２６）集伝という形態に限定しなければ、巻６２管晏列伝と巻６５孫子呉起列伝合伝にも同様の形式が用いられている。又、刺客列伝の形式については、杉山寛行氏の「刺客列伝を讀む――主題と變奏」『山下龍二教授退官記念中國學論集』研文社１９９０年所収に考察がある。

注２７）大室幹雄『新編滑稽――古代中国の異人たち』せりか書房１９８６年の「異人（ストレンジャー）」についての考察参照。

注２８）「贅壻」について『索隠』には、

贅壻．女之夫也．比于子．如人疣贅．是餘剰之物也．
贅壻とは、娘の夫のことである。実の息子と比べると、人の疣と瘤のようであり、余剰の物である。

とあり、「優孟」、「優旃」について『正義』には、

優者．倡優也．孟者．字也．優旃．亦同．旃．其字耳．
優とは芸人のことである。孟は字。優旃についてもまた同じ。旃は字である。

とある。